



に記す事はおかしく思われるかもしれないが、実際の理系の人間にはこの境界が曖昧で仕方がない（私自身もまだ曖昧であろう）。文科系の学生ならばここまで離反することは少ない。それは常識、技術、科学のサイクルをどこかで理解しているからだろう。そう、ここでわざわざ挙げて述べたのは、理系の現在のサイクルでは、科学が常識を行為的、実践立場的な知識たらしめる程能力を帯びているように見えないと言いたいからだ。確かにここで一つの食い違いがある、哲学上の常識は本来意識されて現れるものではないと言う点だ。しかし、理系の人間の行動作法は観察と実験に寄る、すなわち科学を「主観」の様に考える。積もるところ、それでは理系の人間は納得できないのが本当のところだろう。

よって、哲学を学んでみれば先ほど述べた「哲学という視点でくるっと包んでくれた」はここに帰着する。「常識」「科学」など、哲学上意味と、自分の常識上の意味と違えども、それを類似させて引っ張り合わせることで、捕らわれの少ない広義な思考を手に入れられた気がする。これこそが、私がこの講義を履修した意味になるのだろう。(1,625字)